

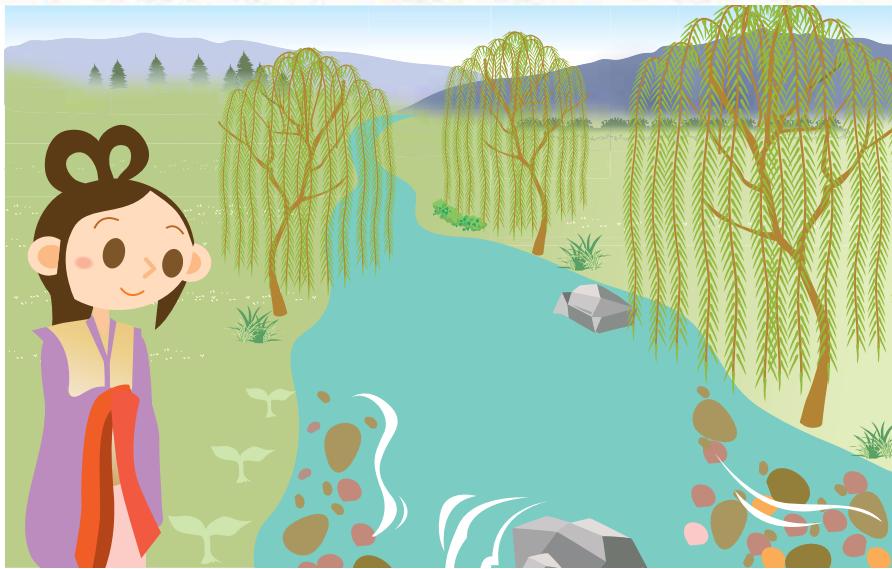
はじめての

万葉集

Vol. 11

日本に現存する最古の
和歌集『万葉集』を
わかりやすくご紹介。

春の訪れを告げる柳



うちのぼる佐保の川原の青柳は

今は春べとなりにけるかも

大伴坂上郎女(巻八の一四三三)

(さかのぼつて見る佐保の川原の青柳は、もうすっかり春の風情となつたことだなあ)

しだいに寒さが緩み、春が待ち遠しくなってきました。この時期に春の足音に耳を澄ませるのは昔も今も変わりません。今日はお水取りが春の訪れを告げるものとして有名ですが、『万葉集』の歌々では自然の風物にそれを感じています。

たとえば右の歌は、佐保川のほとりに芽吹く青柳に春を敏感に感じ取っています。柳は三月から四月にかけて綿毛状のふわふわした可愛い芽が出ます。そのぶつくりとふくらんだ萌芽は、昔から春の訪れを告げるるものとして馴染み深いものでした。

柳の芽吹きは春の訪れを告げています。ぜひ小さな春を見つけてください。

(本文 万葉文化館 小倉久美子)

です。そのため呪力をもつ神木と考えられていきました。『万葉集』には柳を髪飾りにして長寿を祝う歌(巻十九の四一八九)や、田植えのときに柳の枝をさし立てるようすを詠んだ歌(巻十五の三六〇三)がみられます。

一般的に柳は、枝葉の垂れる垂れずに立つものに「楊」(カヤナギ・ネコヤナギ)の文字があります。ただし『万葉集』では両者の違いが明確ではありません。また、柳は中国から渡来種なので梅花とともに詠まれることが多く、しなやかな春の青柳と香しい梅花との取り合わせが好まれたようです。

今回の歌を詠んだ大伴坂上郎女は、平城京のすぐ東側に広がる佐保に住んでいたようです。この地を横切るように流れる佐保川は、万葉集に17首詠まれるなど奈良時代から親しまれていました。今でも、佐保川沿いにはいくつもの歌碑が立っています。綺麗な桜並木が続く堤防を、万葉歌碑を探しながら歩いてみてはいかがでしょうか。



▲写真提供:奈良市観光協会

佐保川の桜

答えは来月号を見てね

今月の問題

今も漢方薬に使われているんだよ。



①薬材でした。
クイズ
先月の答え

Q 大伴坂上郎女の異母兄にあたるのは誰でしょう?

- ①大伴家持
- ②大伴旅人
- ③大友康平